

2012.10.13 日本イスペインヤ学会第58回大会

シンポジウム「日本のスペイン語教育の課題と展望—今、教師としてできることは何か—」

スピーチ原稿 2012.10.13

現場教師の声が行き交う ”plaza” で生まれるもの
—TADESKA の活動から見たスペイン語教育の現状と展望—
小川雅美

0. はじめに

Buenas tardes. Ante todo quisiera dirigir mi más cordial agradecimiento tanto a todos ustedes por compartir el tema de la enseñanza de español, como a la profesora Terumi Ezawa, anfitriona de este congreso, por la organización de este simposio. Me disculparán por hablar en japonés y por tratar principalmente de los profesores japoneses.

この度のシンポジウムのパネリストとして、江澤先生より TADESKA にお声掛けをいただきました。TADESKA は関西で活動しているスペイン語教師の会です。以下、レジュメに示した順番で話を進めさせていただきます。なお、8月にメンバー内で TADESKA についてのアンケートを実施しました。結果の詳細は、TADESKA ホームページに掲載しております。

1. TADESKA 紹介

1.1 設立の経緯

2006 年の初めごろ、マルガリータ・ナカガワさんが私に、大阪外大の講師数名で教授法の勉強会をしないかと誘ってくれました。その後、勉強会への関心が大学の枠を超えて存在していると知り、なるべく多くの人に参加できるような会を有志で企画することにしました。おりしも、ヨーロッパ共通参照枠が日本に紹介され、外国語教育の大きく新しい動きが迫っていました。

同年4月、教師ら20名が初めて集まり、関西スペイン語教授法ワークショップ、Taller de Didáctica de Español de Kansai（略してTADESKA）がスタートしました。「ワークショップ」という名称にしたのは、従来の研究会のスタイルに囚われず、メンバー全員がそれぞれ独立した教育活動の実践者として参加する、という意図からです。この時の雰囲気について、メンバーの一人が、次のように語っています。「どんな風に進めていくか、どんなテーマで毎回話し合っていくか、みんなが口々に発言していった。関西のスペイン語教育の現状を改善し、個々の技術も向上していこうという期待にあふれていた。」

画面に示しているアンケートの結果は、各メンバーの、TADESKAへの参加動機のうち回答数の多かったものです。多くのメンバーは、自分の知識を増やし職能を上げるのはもちろんのこと、他の教師と交流し、自分の観点を变えつつ学びたいということも含めた複合的な動機を持っていたことがわかります。

1.2 会の概要

次に、会の概要についてお話しします。例会は、ほぼ毎月、大阪梅田で開いています。教育機関でスペイン語教師の仕事をしている人々を対象とし、連絡先をいただいている個人を「メンバー」とみなしています。現在メンバーは全部で75名、毎月の参加者は10名から15名程度です。ほとんどが日本人ですので、使用言語は主に日本語ですが、スペイン語が使われる場合もあります。

活動内容については、数か月から1年単位で方針を話し合いで決めています。活動形式は、プレゼン、グループディスカッション、ブレインストーミング、教材の持ち寄り、書籍や論文のレビュー、機材の使い方の紹介など、様々です。毎回担当者を決め、担当者が具体的なテーマや活動内容を設定します。また、「関西スペイン語教師の集い」と題して、年1回のイベントを実施しています。

2. 過去に取り上げたテーマから見える日本のスペイン語教育の問題や課題

TADESKA で扱ったテーマを私なりにおおまかにまとめると、画面でご覧のようになります。表の上の「学術（専門）」と書かれたところは、専門的立場からのプレゼンもしくは出版物の講読やレビューで、参加者にとってはトップダウンと言えます。表の下「実践（経験）」と書かれたところは、メンバーの職場経験に基づいて問題提起、実践報告、議論をする部分で、ボトムアップと言えるでしょう。学術と実践とは双方向的な関係がありますし、実践にはいろいろな要因が絡みあいますので、この分類は便宜的なものです。

なお、お手元のハンドアウト裏面に、小さい字で申し訳ありませんが、今年7月まで扱ったテーマを、画面の表に合わせて網羅しています。これらがそのまま、日本のスペイン語教育の問題というわけではありません。しかし、実践の部分は TADESKA のメンバーが自らの経験に照らして立てたテーマですので、ここから、教師が抱える問題をある程度浮彫りにすることができると考えます。

1) の教育計画については、特に動詞の形態の提示順が話題になりました。2) の教室環境・教具については、設備や持ち込む機材によりどんな可能性が開かれるかの実践例を数名の参加者が示しました。3) の教材については、参加者が使用した教科書についてコメントしあったり、自作教材を持参して紹介しあったりしました。4) の教授方法では、参加者が授業で経験した問題と、教え方についての提案の両方が扱われてきました。5) の学生については、特にモチベーションというテーマで何度も話し合いました。6) の教師については、自分の仕事やモチベーションについてふりかえる活動や、授業評価アンケートについての情報交換、研究者としてのアイデンティティと学生の興味との接点を作る授業方法の紹介が行われました。7) の評価については、テスト作成と成績評価、合否判定を、どのような指針で行うかというテーマを扱いました。

さて、ここで、「問題」と「課題」について区別をしたいと思います。問題という言葉は、現場での困りごと、つまり仕事の遂行の妨げで、早急な解決が求められることという意味で使いたいと思います。一方、課題は、自らが主体的に設定し、じっくり向き合っていくものという意味で使いたいと思います。

問題がもっとも顕著に立ち現れるのは、授業中、教師が学生らとやりとりをする時ではないでしょうか。学生たちの声や表情に元気がない、宿題をやってこない、授業に集中していない、その結果として教えたことを覚えない、となると、教師は授業を期待通りに進めにくく、ストレスが生じ、自分のやり方に問題があるのではと不安になるでしょう。教室では、教師は自分ひとりでその状況に対処せねばなりません。そこで、ともすれば、その問題を、教師はひとりで抱え込むことになってしまいます。

TADESKA 設立時に、まっさきにモチベーションを取り上げるようになったのですが、それは、会に出席していた現場教師にとって喫緊の問題であるという見解で一致したからです。この時は、やや漠然と「学生らのモチベーションが低い。どうすればよいか」という対症療法的な話になりました。モチベーションの理論について少し勉強した後、毎月一人ずつが **mini charla** と私たちが名づけたイニシャル・トークを行い、現状について参加者同士が話し合い、そして、モチベーションを上げるためのアイデアを何でも出し合って整理していくブレインストーミングを行いました。特にブレインストーミングは、自分たちの声の大きさに驚くほどにぎやかな活動となりました。それまでバラバラに仕事をしていたスペイン語教師たちが専門分野を超えて知り合い、問題を共有し、お互いのアイデアを参考にし、案外自分でもよい工夫をしてきたという事実気づき、肯定的な気持ちになったと思います。その後、他の様々なテーマを扱いましたが、しばしばモチベーションに関連した話題になりました。

それから約5年後、再びモチベーションが中心テーマになった時には、モチベーションを、授業の進行そのもの、教材、機材、学生の発するエラーの訂正の仕方、そして教室で教師が使用する媒介言語の側面と関連づけて捉え直しました。このような分析的な切り口は、私たちが、モチベーションを、早急に解決すべき問題、除去すべき不安の種としてより、むしろ、じっくり多角的に取り組むべき課題として見るようになったという変化を表しているように思えます。

モチベーションという用語は、個々の学生が、科目履修制度の中でスペイン語を選択する動機を指す場合もあれば、授業活動の経験を通して刻々と変化していく、心的エネルギーのベクトルを指す場合もあります。モチベーションは、教師個人の力量や学生らの資質に帰せられるというより、むしろ、制度、教材、教室環境などが当事者らと絡み合って生じていく複雑な心的現象であると言えます。今後、より包括的な議論があってもよいのではないのでしょうか。

3. 私たちの活動スタイルとその振り返り

次に、TADESKA の活動スタイルについてご紹介しながら、「教師の学び」について考察したいと思います。

TADESKA には、いくつかの方針があります。

第1に、自分たちにとって必要である、おもしろいと思えることは、スペイン語教授法の枠を超えて試しています。よって、教師のモチベーション、学生の受講態度への対応なども中心テーマになります。

第2に、ゆるいつながりの会ということです。教師たちは仕事や研究などで多忙ですので、活動内容で高いレベルが要求されると、参加しにくくなってしまいます。そこで、むしろ、気楽に何でも言い合える場であるようにしています。こういう雰囲気を保証するため、お互いの発言をむげに批判しない、という約束を設立時に作りました。

第3に、メンバーは、教歴やポジション、専門分野に関わらず、自分の授業の責任者として自立した、対等の関係であるという前提です。特定の人意見が権威を持つような流れを作らないよう、言う人と聞く人の役割が固定化されないようにしています。毎回の担当者は、時に専門外のことにも挑戦して、綿密な準備をして活動に臨んでいます。教歴の短い参加者が新鮮で的を得た指摘をすることもあります。

第4に、ディスカッションにおいては、TADESKA 全体として「これが正しい」「こうすべきである」という結論は出さない習慣にしています。参加者は、正しい答えをもらいに來るのではなく、コミュニケーション活動の中から、自分にとってのヒントや新たな疑問を感じ取っていくことになります。

このように作られていく **TADESKA** は、いろいろなスペイン語教師が自由に集まり、気楽な雰囲気の中を声が飛び交う plaza、広場のようなものと私は考えます。たまにふらっと参加するのも歓迎です。高校の先生も毎回参加されています。また、ネイティブの参加者からは、日本人とは異なる見地から有益な指摘や提案が出て、大きな支えになっています。

先月の例会では、アンケートで得られたたくさんのコメントを、私たちのニーズに照らしてカテゴリーにまとめていくというグループ作業をしました。この時、あるグループが、「知識を増やす」に加えて「不安を解消する」というカテゴリーを立てました。**TADESKA** は決して教師の親睦会としてできたものではありませんが、心理的な効果については、アンケートや雑談で、多くのメンバーから支持されています。

さて、「解消すべき不安」とは個人の精神的な弱さの表れなのでしょうか。どうもそうとは決められないようです。まず、スペイン語教師は大学では少数で、職場でスペイン語教育について話し合う機会が少ないということがあります。次に、**TADESKA** に来る人は、自分がやっている授業の方法が正しいと思い込みたくない、つまり「独りよがりへの疑問」を持っているように私には思えます。教師は、学生らを評価する権限を持ちますし、正しいことを教えているとみなされます。そのことを自明視せず、自分のやり方に疑問を持ち続け、異なる考え方や振る舞い方を持つ他の教師たちとのコミュニケーションを通して自分の方法を相対化する、このようなバランス感覚が働いているのではないのでしょうか。

TADESKA の活動は、理想通りに行くわけではありません。対等な関係で何でも言い合うことは、実際にはそれほど簡単ではありません。ついたくさん話す人と、遠慮して聞き役になってしまう人ができて不思議ではありません。使用言語がもっぱら日本語なのでネイティブのメンバーが参加しにくいという問題もあります。自分に合わないと思って参加しなくなる人もいるでしょう。担当者がなかなか決まらないこともあります。

また、TADESKAにはアカデミックな実績というものがありません。学術・教育上の業績を上げたり、専門技術の訓練を受けたりする方が、いわゆるプロの道なのかもしれません。TADESKAも、メンバーの希望によってはいつかそういう試みをするかもしれません。しかし、アンケート結果のコメントによると、遠慮なく安心して発言できる場であることが、TADESKAの存在意義のひとつになっているようです。身の丈に合わせて、試行錯誤を許容しながら進むのが、私たちのスタイルと言えるでしょう。

ところで、ワークショップについての新しい理論に、学び (learning) と学びほぐし(un-learning)のコンセプトがあります。学びとは、ゴールが設定されたある道筋に沿って進み、知識を積み上げていくものと考えられがちですが、より深い学びはそれだけではなく、学びほぐしのプロセスも必要であり、そこにワークショップの役割があるというのがその主張です。

高木光太郎は次のように言っています。

「まなびをゴールとの関係からではなく、不確定の未来に向かう変化のプロセスとして捉える必要がある。[...]「まなびほぐし」の学習論は、いったん編み上げられた知が解体されつつ、不安定に揺らぎながら何か新しいものへと変化していく過程そのものに焦点をあわせる。[...]どこかで誰かによってあらかじめ定められた未来に向かうのではなく、まだ姿がよく見えない未来の時間を「いまここ」で生成する。これが「まなびほぐし」の学習論におけるまなびの基本的な姿である。」 (高木 2012:24)。

TADESKAの活動は、不器用でもどかしく思えるかもしれませんが、このまなびほぐしの学習論と共鳴しています。もちろん、研究でも教育現場でも、正統的なやり方があり、これを知らなければ信頼に値する仕事はできないでしょう。しかし、人間の本性には、正しいこと、効率的なことに直線的に向かうのではなく、寄り道をしたり、敢えてみんなが行かない道を進んだりという方向へのモチベーションもあるのではないのでしょうか。外国語を選ぶ際、マジョリティの選択からあえてはずれて、日本から一番遠い地域の言葉、スペイン語の道に進む気持ちと似ている気がします。

今後のTADESKAについては、アンケートで様々な提案がなされています。これまで行った活動をさらに拡充させたいという意見の他に、TADESKA独自の教材や教案を作りたいといった、より積極的な意見も出ています。これらをどう調整して活動を継続していくかという課題を前にして、不安定ながら次の一步を進めているというのがTADESKAの姿です。これは、迷いながら自分の足で異国の地に行く旅人のようです。

4. 教師としてできることは何かについてのある見方

参加者は、TADESKAという広場で仲間と語らい、そこから仕事のヒントを得て、帰路につき、自分の実践や自分を取り巻く外国語教育について考え、新しい試みをするのでしょ。私も、自分なりに考察をします。

動物は、意識のある限り、何等かの学習をします。それは、サバイバルのためであつたり、快樂を得るためであつたりします。このような学習は根源的なものであり、教室であつても常に行われているはずで。一方で、学校教育では目的が作られます。例えば、TADESKAメンバーの柿原武史さんは、言語教育政策研究の視点から、共著書の中で、「多くの学生が[...]多様な言語に触れ、多様なものの見方を身につけることが」外国語教育の存在意義として要求される実績であると述べています。研究においても、教育機関においても、独自の教育の目的が立てられるで。そこを均一にする必要はないと思います。ただ、学習と教育とがどう出会い、どのように授業活動が展開されていくか、その現実の姿を、背景とともに丁寧に見ていく必要があると考えます。

私は教育活動の一端を担いながらも、自分自身がスペイン語学習者として突き当たってきた壁があります。母語環境で当たり前と思っていた言語音声の出し方、言葉の意味、会話の構築の仕方、さらには思考様式、これらがいかにかに当たり前でないかを、今でも実感します。このような、言語活動における自明性の崩れは、日本語とスペイン語の言語間距離、および文化歴史的な距離にもよると思われ。これはまさに、思考活動も含め、身体化された言語使用の学びほぐしに他なりません。

外国語の学習に母語運用能力の学びほぐしの側面があるとするならば、外国語学習とは、今ある言語能力に新しい言語能力を上乗せすることというより、言語使用者である自分全体の在り方の変容であることと考えられないで。か。

もし、学生たちが、ローカル性とグローバル性とが入り混じったこの世界の中で、自己の在り方に不安を感じたり、自分の生活を支配している言語と世界を支配している言語の範囲内で物事を見ていることに、漠然とでよいので疑問を感じたならば、そこに、新しい言語文化に踏み出す一つの可能性を見出すことができるでしょう。その可能性に対して、教育が、新たな視野と、学習者が独立できるまでの道を提供し、学生たちと教師とで授業活動を作っていければと願います。

結語

以上、ワークショップ活動の紹介を中心にお話いたしました。これは、あくまで私の今のバージョンであり、メンバーによって照らし方の異なる、「それぞれの TADESKA」があるでしょう。とはいえ、多くのメンバーに支えられて、ただいまのお話をさせていただくに至りました。

最後に、TADESKA でこれまで使用させていただいた論文の著者とタイトルを、画面上に掲載いたします。著者のみなさんに、この場を借りて御礼申し上げます。

ご清聴ありがとうございました。